

さあ、音の鳴るほうへ

02E064 山田 佳苗

プロローグ

家出するんだ 家出するのさ
家出するのさ 家出するのさ
明日が来たら どこか遠くの すてきな街へ

バスケットロードからの脱出/JUDE

誰もが心から満たされて、穏やかで、でも光が溢れていて、楽しくて体が、心がワクワクして「この先に何があるのか」とドキドキするような世界に憧れるはずだ。

日常ではない世界に、日常では決して味わえない感覚に憧れるはずだ。

だから人間は「天国」だとか「桃源郷」だとかいう言葉でその世界を、感覚を必死に掴もうとする。誰ひとり、そんな世界が実在するのかさえ分らないから「夢」という言葉が生まれたのかも知れない。それでも「夢」を掴むために、信じるために私たちは毎日を生きる。知識を頭に詰めて、お金を稼ぎ、眠っては夢を見て、そして気づく。

「夢」は「夢」でしかないということ。

戦争をしても裕福になっても人間が満足しないのは、戦争でも裕福でも「夢」は実現しないから。本当は、人間はそんなことを分かっている。

でも「それなら…」と、また人間は「夢」をつくらうとする。

どうしても諦めることができない。「必ず、どこかで、実在しているはずだ」と。

そう、幸せに突っ伏して、体中が甘い薫りに満ち満ちていく感覚を想像しながら。

音楽の旅へ、自分探しの旅へ

私は音楽が大好きだ。特に大好きなのがROCK。

毎年、野外ROCK FESTIVALに行くのが当たり前。毎月、ライブに行くのが当たり前。毎日、音楽を聞くのが当たり前。音のある生活が当たり前。嬉しくて悲しくて、怒って、苦しくて、悩んで、私は音楽を聞く。

楽しくて心踊ることがあっても、悲しくて理不尽なことがあっても音楽を聞く。感情と共に音楽は世界をなぞる。たとえば戦争という人間最大の悪なる表情と、「戦争撲滅」と訴える人間最大の善なる表情の間で我々は揺れ動く。たとえば、時に“生きている”のではなく“生かされている”ことを実感する自然現象の厳しさに、人間は感性という生まれ持った慈しみで立ち向かう。怪我を負った隣人に治療を施すかのように。思い悩む隣人に手を差し伸べるかのように。

『想いを綴り音に乗せて歌う、たったそれだけの行為に一喜一憂する理由が知りたい。』

これがすべての始まりだった。

「音楽」とは一体何か。

今年、私はこの問いと共に夏を歩き続けた。会う人、会うモノに問い続けた。娯楽、青春、癒し、LOVE&PEACE、反抗・聞いた人の数だけ様々な答えが返ってきた。そこで分かったことは「音楽」が「物凄いモノ」であるということ。

人間を動かす「音楽」。私を動かす「音楽」。私の大好きなROCK。

世界を、そして私を「音楽」という覗き穴から見たくなって旅に出た。

第1章 —FUJI ROCK FESTIVAL 編—

「音楽」という色

世界はくだらないから ぶっとんでいきたいのさ

天国はくだらないから ぶっとんでいきたいのさ

希望は嘘だらけで ぶっとんでいきたいのさ

だから僕はあの娘と ぶっとんでいきたいのさ

I LOVE YOU

Girl Friend / THEE MICHELLE GUN ELEPHANT

私もその中の一人だけれど、毎年毎年よくこれだけの人間が集まるなあと、驚きを通り越して感動してしまふ。1999年から新潟県苗場で開催され続けている FUJI ROCK FESTIVAL。簡単に説明すると海外で、日本国内でロックシーンを騒がせているミュージシャンやバンドを集めて、3日間山の麓でライブし続けるのだ。ロックが好きな人間にとっては夢のFESTIVAL。

高速道路を降りてひたすら山の中へ入っていくと、まず山の斜面に色とりどりの数百、いや数千はあるかもしれないテントが目飛び込んでくる。あのテントの数だけの人間がいるのかとある種の恐怖感を抱く感覚もさりながら、これだけ「音楽」を欲する人間がいるのだという事実を突きつけられる。—「音楽」が私たちに何を与えてくれるというのか。それとも私たちが勝手に何かをもらおうとしているだけなのか。—そんなことを考えながら車を降り、入場ゲートまで全身から沸く興奮をひしひしと感じつつ歩いていく。

「日常はつまらない」と毎日考えている訳ではない。やらなければならない義務やこなさなければならない物事を実行することはつまらなくも下らなくもない。何故ならそれは生きていく為、それ以外に答えはないからだ。「生きていくこと」につまらないも下らないもない。ただし「生きていく」為にはそれなりの知恵を必要とするだけで、だから私たちは義務や物事を実行していくのだ。けれど、そう簡単に「生きていく」為だけに実行している訳ではない。実行していく中で付加が付きにくる。友人との出会いであったり、かけがえのないモノとの出会いであったり、新しい発見との出会いであったり、要するに「生きていく」ことが義務や物事だけの為ではなく、それ以上の価値を見出していく。平たんに「生きていく」理由に色がついていくのだ。「日

常がつまらない」と考えるのは、人間がその色を欲しているからだ。

世界に色は数え切れないほどある。単純に赤、青、緑、黄だけではない。それは自然を見れば一目瞭然だ。夕焼け時の何十もの色や、森の深い緑、晴れ渡った空は色んな色でつくられている。同じようにそれぞれの人間が欲している色は限りないだろう。その一色が「音楽」なのかも知れない。

入場ゲートを目指して歩いていく人たちが増えてきた。

ここにいるすべての人間が「音楽」という一色を欲して歩いていく。車から見た色とりどりのテントの色が何か意味のあるもののように思えてきて、私が抱いた恐怖感の意味が分かった気がした。

「黒」はROCKの象徴色

私は黒い服ばかり好んで着てしまう。「黒」自体が他の色とは違う一すべてが混ざり合ったような特別な色だと私は思っている所がある。

「白」と「黒」は対称色で、明・暗を象徴する。明は陽、暗は陰。警察は犯人ではない人をシロ、犯人をクロと呼ぶ。つまり「白」は良い、「黒」は悪いという判断基準の成立。いや、自分で言うのもなんだけれど私は悪い人間ではない。

「今日この日に ROCK という音楽を発表します。」と言った人物がいたかどうかは分からない。(多分ないと思う)まして「ROCKを象徴する色は黒です。」と提言した人物もいないだろう。それでも入場ゲートをくぐって会場を見渡せば黒のTシャツを着た観客、真夏に黒い革ジャンに黒の革パンで身を包んだミュージシャンや観客は沢山いる。

事は単純なのかも知れない。「黒い服は恰好いい」それだけかも知れない。

人間は時に意味のないものに意味をつける能力に長けている。理性と感性はしっかりとした垣根で隔てられているようで、しかし時に、煙草から出た煙のつくる曲線のように脆い。

「とりあえず腰を下ろせる場所を確保しよう」と私と友人は会場内を歩き回って探し、ステージからステージの間の道に沿っている、少し広がった窪地にレジャーシートを敷いた。そしてこの日の為に買っておいたステンレス製のビールグラスを2つ手に持って、私はビールを買いに出かけた。

てくてくてくて、数え切れない人ごみの中を歩く。前の人の足を踏まないように地面をしっかりと見て歩く。この地面もかつては色とりどりの木や、葉や、生物、その他もろもろだった。今や黒く固まったこの地面のように、ふと、この会場にいる人間もいろんな色を吸収し「黒く」なってゆきたいのではないかな。

「黒」は何色にも染まりたくないという自己を誇示する色ではなく、自分の未来を培う為に目指す色なのではないだろうか。浮き足立った新しい自分を求める為ではなく、今の自分をより太くする為の色。たとえばどんなに過酷な場所でも芽を出す雑草のように。雑草は名前の通り疎まれる存在だ。ぼうぼうと、うるさいように茂っているから誰もが踏みつける。でもよく見ると実に可憐な花や実をつけていたりする。たとえ「意味のない雑草」と言われようと当人たちは関係なく、自分の意思を突き通して生命を絶やさぬよう生きていく。この「黒い」地面を原点にして未来を培う為に生きていく。ならばこの会場にいる人間と同じではないか？

ROCKは常識を外れた人間の象徴にされることがある。だから判断基準の「黒」と同等になる。理性で考えれば、の話だが、では理性で見てみよう。私は今、ビールグラスを持って同じようにビールを求める人の列に並んでいる。ビールを盗む人は見当たらない。長い行列は見えるが。

理性と感性はしっかりと垣根で隔てられているようで、しかし時に、煙草から出た煙のつくる曲線のよ
うに脆い。

また黒い地面を見ながら、友人の待つレジャーシートに戻る途中、黒のジャケットでぼつちりキメた人を見
つけた。颯爽と歩くその人がすごく恰好良く見えて、私のふとした思いつきがまんざらでもないような気がし
て、「友人にしてみれば私は悪い人間だなあ」と笑いながら手にしたビールを一口フライングしたのである。

交差点

たとえば煙草を片手にふかした人が“ボイ捨て撲滅運動”の一環として、吸殻一斉清掃をおこなっている姿
を見たら誰もが違和感を持つ。

レジャーシートで一息ついた後、私は見たいライブの時間までカメラを首にぶら下げてふらふらと会場内を
歩いてみた。会場はかなり広く（入場ゲートから一番遠いステージまでは歩いて15分もかかるのだ）、ステー
ジからステージの間には露店が所狭しと並び、またちょっとしたミニライブやイベントが行なわれている。私
はゲートから数えて3番目にあるステージに立ち寄ってみた。既にこのステージでトップバッターのミュージ
シャンがライブを始めていて、ギター音はギャンギャン鳴り、リズム隊の鳴らす音が地面を這って足の裏から
ズンズン体に響いてくる。観客は歓声や奇声をあげて体を揺らしている。ROCK FESTIVAL内では見慣れたこ
んな風景の中で、ある一人の人間の姿に私は釘付けになった。

モヒカン頭のお兄ちゃんが音楽に体を揺らしながら、観客にゴミの分別指導をしている。

誰もが振り向いてまで見てしまうような“非”常識な髪型の人間が、誰もが称える行為をしているという矛
盾が今まさに、私の目の前で実行されていたのだ。

別段、モヒカン頭が悪い訳でもないし、ゴミの分別指導は必ず誰もが好印象を持つ人がやらなければならない
というルールもない訳だけれど、でも私たちには暗黙の了解の如く「善事は善人がするものだ」と、そこに
矛盾が発生する事態は考えていないのだ。その証拠にROCK FESTIVALというある種社会と一線を引いた場
では、社会で通じる認識がこれほどまでに異を唱える。何とも可笑しいものである。

確かに「セックス&ドラッグ&ロックンロール」時代は存在した。でこぼこした表面を綺麗にならしたよう
な、一律化したような、もっと言えば人間の汚い部分は見て見ぬふりをしようと、作りあげた笑顔で生活する
世間を嘲笑うように若者は反対方向に走った。欲望を認め、個性を追求し、自分をも含めた“汚い人間”を一
これこそが生きている証だとも言うように—“ROCK”という名に身を投じた。「作り笑いをして生きるよ
り欲望で、ドラッグでぶっ飛んだ方がよっぽど生きている」的思考を本当に実践したのが「セックス&ドラ
ッグ&ロックンロール」時代だったと思う。

何が言いたいのか。要するに“ROCK”は一笑いたい時に笑う、泣きたい時に泣く、美しいものを見たら「美
しい」と口に出す、苦しい時に「苦しい」と叫ぶ—「社会」が基準なのではなく、「生きること」を基準にし
ているのではないかと私は言いたいのだ。ROCKがセックスもドラッグも容認しているように感じさせるのは、
善悪を問う以前にそれもひとつの生き方だという、「社会」の窓越しからではない視点で展開される世界とい
うことではないかと思うのだ。

社会とROCK。

“理性”が主体の世界と“感性”が主体の世界。

あらゆる「世界」の中で私たちは「生きて」いる。やはり、なんとも可らしいものだ。
モヒカン頭のお兄ちゃんは楽しそうに分別指導し続けていた。世界と世界の交差点を逃すまいと、私は首に
ぶら下げているカメラで激写した。

さあ、音の鳴る方へ

心も魂も奪われた妻まじい消失感に襲われることがある。
奪われたのに満たされるというのは矛盾だろうか。
「奪われる」という衝撃は大地から根ごと抜かれたような、大きな穴の誕生を意味する。
消失と誕生。どこかで聞いたことのある矛盾。
戦争と平和。殺し合う人間。平和を祈る人間。

思い悩む姿に美を見る。
悲しみで溢れた涙の美しさ。
苦しみを経て誕生する生。
美しい風景に漂うもの哀しさ。
天才の中に隠れた殺意。
肉を剥がした完全なる骨格の美しさ。
人間の感覚ほど矛盾するものはない。
目の前に在るものに答えなどない。すべては人間の矛盾が形作った「存在」、ただの「存在」。
そんな感覚を持つことがある。

文明が発達したこの世の中でも解明できないことは山ほどある。
山ほどある謎は必ず解かなければいけないのだろうか。
分からなくてもいいことは山ほどある。
目の前で鳴る音が人間にどんな作用を起こすのか、そんなことはどうでもいいじゃないか。
雲の間から光が降り注ぐ。目の前で鳴る音と重なる。
気持ちいい。天国みたいだ。夢みたいだ。それでいいじゃないか。
目の前で鳴る音は素晴らしい。それでいいじゃないか。
そこが肝心だと思う。謎は人を惹きつける。

いつの時代でも音楽が鳴り止まないのは、音楽が解明不可能なものだからだと思う。

本当の「癒し」

雨に見舞われて山の中の会場はひどく気温を失っていた。何か温かいものを求めて私と友人はとある小さな
店に入った。もう承知のように、店と言っても露店が少し進化しただけ。店の前にある天蓋付きのテーブルに
座って私たちは出来立てのラーメンを食べた。雨具を着て、それでも濡れて冷えきってしまった体中の力が抜

けるほどラーメンは温かくて美味しかった。こんなに温かさの大切さを体中で感じたのは久しぶりだった。テーブルでゆらゆら揺れながら柔らかい光を放つろうそくの火も“非”日常で新鮮だ。すると、店内で演奏が始まった。アコースティックギターとウッドベースと簡単なドラムで奏でる、これもなんとも柔らかい音だった。バンドの名前も分からないし、それもおじさんだらけのバンド。間違っても ROCK ではない…。すると今度は店のすぐ脇に設置されているステージから耳を劈くギター音が鳴り響く。これは誰が開こうと ROCK だ。けれど店にいる若者たちはステージに見向きもしない。むしろ迷惑顔してギタリストを睨んでいる。ROCK FESTIVAL に来ているのに ROCK を睨んでいる。若者たちはただ騒ぎたくてこの会場にいるのではない、ただ酒を飲みたくて会場にいるのではない、リズム音でただ体を揺らす為に会場にいるのではない、そう直感した。

「癒し」という言葉は最近いろんな場面に引用されて、音楽にもよく引用される。例えばモーツァルトが残した作品は近代病予防になるらしい。

「さまざまなストレスを感じながら生きている現代人は、常に「神経の緊張」といわれる交感神経優位の状況に置かれている。そのため「リラックスの神経」といわれる副交感神経の出番がなく、そのアンバランスが高血圧、糖尿病などの生活習慣病や不眠などを生み出している。」「バランスを保たせるのに有効な周波数や、リラックスモードに導く『揺らぎ』をふんだんに使っているのがモーツァルトの曲なのです。(埼玉医科大短大、和合治久教授) (2005.11.28 朝日新聞朝刊より)

こんなことを知りながらモーツァルトは作曲していたのだろうか。現代人を癒す為に作曲していたのだろうか。

言っておくがすべての狂いは現代人が現代人自身で作り出した。私は「癒し」という言葉が大嫌いだ。「癒し」を乱用する現代日本は大嫌いだ。だから“病んでいる”病にかかった哀れな人間たちが何を流行らせようと私の表情は何ひとつ変わらない。「病んでいる」を売り物にする人間と、「病んでいる」を美化する社会はせいぜいモーツァルトの音楽でも聞いて「癒される」という軽すぎる幻想に浸ってもらって一向に構わない。ただ、「文化」に肩書きをつけて、手をたたいてその「文化」を称える社会の未来は限りなく暗い。

「ヘッドホンを使って日に2〜3回、20分ほど目を閉じてゆったりして聴き入ると、より効果的です。」(同上)

ろうそくの灯火や自然と体が揺れる音楽が今、私の目の前にある。モーツァルトの音楽ではなくおじさんたちの柔らかな音楽が目の前にある。現代風に言えば、今まさに私は「癒されて」いるらしい。この場にいる若者たちは「癒し」でいっぱい包まれているらしい。疲れて忙しい大人たちの「癒し」が分からない、暇で元気いっばいの、私も含めた若者たちは少なくとも私たちの「文化」 — ラーメンの温かさやろうそくの火の暖かさ — に手を加えず「癒されて」いる。

それでも大人は「若者は持て余すほどの時間があるからだ」と一笑するのだろう。

終わってしまった世界

朝の6時。大きな木の下で目が覚めた。いつの間にかこんなところで眠ってしまっていた。

山の朝はひどく寒く、薄霧がかかっていた。どこにいても体中に響いていた音楽は消え、耳を澄ませなければ聞こえないほど小さい。数え切れなかった観客も私が見る限り、数え切れるほどになっていた。隣で眠り続

けている友人を起こす。

朝の7時。すべては夢だったのだろうか。もの凄く数人間が歩いた道は昨夜の雨のせいもあって既に道の形状をしていない。ぐちゃぐちゃになった泥道を歩いて、封印されてしまったように静かなステージに目を向けてみる。大きなステレオは岩のように音も伝えず、幾重にも色を作り出していた数百のライトも、もう息をすることは無い。歩く人々は疲れ果てた顔を並べて、目に光を失ったゾンビのようにもくもくと歩いていく。

あんなに賑やかだった世界はどこにいったしまったのだろうか。

駐車場に到着して車に乗り、私たちは会場を後にした。

昨夜の雨が嘘のように今日は雲ひとつない快晴で、夏の太陽は通常通りに一日を始めようとしている。我々も通常通りに息をして今日を始めようとしている。けれどもいつもと違う。何かが違う。それは一体何だろうか。

快晴なのに、窓から見えるテントの色がくすんでいたように見えたのは気のせいだろうか。

第2章—RISING SUN ROCK FESTIVAL 編—

甲板で思うこと

私は今、北海道にひた走る船に乗っている。今度は北海道石狩で行なわれる RISING SUN ROCK FESTIVAL に参加するためだ。先回の FUJI ROCK FESTIVAL と同様に私は「音楽」を求めて、そして「ROCK」を求めてはるばる北海道まで足をのばす。

この旅をするようになっていろんなモノに出会うチャンスが格段に増えた。その中でも私にとっての特別な出会いが海原だ。当たり前だけれど本当に、海は広くて大きいなと思ってしまう。一見は百聞にしかず。当たり前なことでも、目の前があるとやはり心を動かさずにはいられない光景だ。

どんなに目を凝らしても何ひとつない海原。どうして波は絶えず生まれるのだろうか。どのくらい深いのだろうか。どんな生き物がいるのだろうか。

何もない海原のひとつ、オレンジ色の太陽が沈んでいく。太陽が沈んで夜が来るなんて当たり前過ぎる自然の摂理だけれど、今そんな理性は必要ない気がする。

誰しも感情が理性を超える時がある。同時に感情が理性を超える出来事がこの世界にはある。

私がカメラでこの光景を写そうとしているのはそれを証明したいからなんだろうと思う。

遠い昔のこと

青い海が生まれたとき

空は燃える太陽に

恋をしたのさ

そしてすべてが

生まれた

森も人も動物も

風も花も

夢も

大行列の後には

毎年嫌な気分になるのはこの大行列。FESTIVAL 会場に入るまで1時間は立ち尽くす。入場するだけなのにどうしてこんなに待たなければいけないのだろう。

私は行列のできる店に行ったことがない。どんなに美味しい食事が待っていようとそれにたどり着くまでの“行列” 試練を考えると、まず行かなくてもいい。私は人間で溢れたデパートが嫌いだ。新春バーゲンなんて大嫌いだ。どんなに可愛い服が安くて沢山手に入ると謳われてもそれを手にするまでの“もみくちや” 試練を考えると、まず行かなくてもいい。そんな私が大行列に並んでいる。

何故、人は行列を作るのか。何故、人は試練に耐えられるのか。例えば行列のできる店に並ぶのは美味しい料理が食べられるからで、バーゲンに行くのは品物が安く手に入るからだ。要するに己に利益があるからだ。己に利益かどうかは、芸能人がよく離婚会見で口にする「価値観の違い」だ。「価値観の違い」は都合のいい言葉で、対人関係において対立しそうな時に大活躍する。人間が何故「価値観」を主張するのか。それは自己主張のひとつだからである。ある対象の価値が高いか低いかは人それぞれ異なる。異なるのは育ってきた環境が異なるからで、だから自動的に自己の表現とイコールの関係となる訳だ。しかし逆に育ってきた環境が違うにもかかわらず価値観が重なる人と出会うと、自己主張という概念は吹っ飛んでその人との結びつきを優先するようになる。何故、人間は結びつきを大切にするのか。それは誰もが“母親” という存在から生まれてきたからである。人間はこの世界に突然、ポンと存在するのではない。必ず誰かの“分身” として、初めてこの世に誕生することができる。だから結びつきを大切にすのだ。結びつきを大切に思うから自己主張を抑える。抑えることの出来ない時は「価値観の違い」を主張すればいい。主張することでそれが己にとって利があるか、害があるか半別する。私が今、行列に並んでいるのは…。

やっと入場ゲートまでたどり着いた。

私が行列に並んでいたのは会場に入りたいからだった。

思考が深くなりすぎて毎年嫌な気分になる。

煙草の「宗教」

私が煙草を口にするようになったのには一応の理由がある。しかしよく尋ねられることがあるが、いつも適当な理由をつけていた。本当の理由が余りにも単純だからだ。

「あのミュージシャンのように恰好よくなりたい。」ただそれだけの理由だった。

「同じ銘柄の煙草を口にすると、架空で存在しているように感じるミュージシャンが自分と同じ空気を吸っているみたいだ。」そんな妄想から始まった。

入場ゲートをくぐって私と友人はまず2日間の生活場所を確保、テントを立てて一服しようと喫煙場所へと向かった。会場の喫煙場所もいつも大盛況だ。ここにいる大多数の観客が喫煙者。このご時勢の中、喫煙禁止はどこ吹く風。この会場は“喫煙” が禁止なのではなく“禁煙” が禁止のようにすら感じるくらいだ。皆、ミュージシャンが煙草をくわえながら写っている写真姿によく似ている。

RISING SUN ROCK FESTIVAL のインターネットサイトにはBBS と言われる、要はインターネット上でコミュニケーションできるように誰もが書きこめる場所があるのだが、今年は物議が醸し出されていた。いわゆ

る“荒れたサイト”となったのだ。原因の発端はあるミュージシャンがこの RISING SUN ROCK FESTIVAL に出演する是非を問う書き込みだった。「あのミュージシャンが出演するくらいなら行かない」「ロックフェスもう終わりだ」と言う者が続出した。

「ロックフェスティバルに行く」ということは人それぞれに理由があるだろう。単純にお祭り騒ぎ感覚で、新しい出会いを求めて、またはストレス解消に行くという人もいるだろう。しかしこれらの理由だけではロックフェスティバルは成立しない。先の理由はあくまでも付属品に過ぎない。もっと明確な核があるからこそ、何万人という人間が集まるのではないか。

「好きなミュージシャンがいる。」そう、これだ。「好きなミュージシャンが出演する。」「見たい。」「このミュージシャンの音楽が好きだから。」「毎日聞いているあの曲をナマで聞きたい。」「それじゃ以前のライブに行った時買ったTシャツを着ていこう。」「だって私にとってこのミュージシャンは特別だから。」「あのミュージシャンの曲は私を助けてくれる。」「他のミュージシャン？全然 ROCK じゃない。全然特別じゃない。」「本物の ROCK を鳴らすのは私の特別な、あのミュージシャンだけ。」「他のミュージシャンが同じステージに立つ？本物の ROCK が汚れてしまう。」「どこかで聞いたことがありはしないだろうか。うなずける思想に身を捧げ、だから毎日説法に耳を傾け、拝みの対象の象徴品を身につけ、崇高に扱う—そう、すべての核は「音楽」が「宗教」だということだ。ロックフェスティバルを愛する者にとってミュージシャンは“宗教家”であり、“宗教家”が導かれる RISING SUN ROCK FESTIVAL は“聖地”なのだ。

この世界に内在するあらゆる「宗教」の中で、どの宗教が長けているなどと考えるのは少なくとも間違っている。同じように誰が何を愛そうと、大切にしようと、どこを聖地にしようと、誰かの ROCK がどんな存在であろうと、そう簡単に判断を下せるほど人間は強くない。煙草を吸う観客たちがミュージシャンに見えるのは、あくまでも私の「宗教」観だ。「宗教」は人間が創り出した最大の妄想だと私は思う。世界は「宗教」をどう捉えて醜い戦いをしているのだろう。

あるライブで私の隣にいた女の子のことを思い出した。ライブが始まってからずっとはしゃいでいた彼女は、ある曲が始まると地面に座り込んだ。びっくりして見ると彼女は手を合わせて目を閉じ、曲を口ずさみ、体を揺らし、そして泣いていた。しかし曲が終わる瞬間、彼女は穏やかに笑っていた。

その出来事は今も忘れられない。

何かをこするなら

どっかに魂を売っ払ったほうが

僕には合ってたんだ

それだけ

メタリック/THEE MICHELLE GUN ELEPHANT

「愛する」ということ

“ホワイトバンド”を知っているだろうか。真っ白なゴム製で、アスタリスクマークが3つ印されたホワイトバンド。今年テレビで、街でこのホワイトバンドを手首につけた人を一度は見かけたはずだ。「ほっとけない、世界のまずしさ」キャンペーンの一環で、ホワイトバンドの売り上げが活動資金にあてられる。アスタリ

スクマークの意味は「地球のどこかで3秒に一人、子どもの命が極度の貧困により失われている」だという。会場でライブの合間に活動家の人がステージに立って訴えていた。

「誰かが困っていたら手を差し伸べなさい」と、小学校の道徳の時間に先生が言っていたような気がする。「目の前だけが世界」の、イチ小学生として純粋こうなずいたし、素直な気持ちで実行していたと思う。成長するにつれて、「目の前だけが世界」ではないことを知った。純粋で素直な気持ちだけで処理できない出来事が増えた。だから純粋こうなずき、素直な気持ちで実行することがなくなった。「綺麗事」という言葉を知った。

会場ではホワイトバンドが飛ぶように売れている。その場の雰囲気でも買う。ステージ上の活動家が「ご購入いただきありがとうございます！」と叫んでいる。私の300円で、この会場にいる観客の300円で誰かの命が助かる。命はなんて安いモノだろう。音楽を聞きに来て、その場の雰囲気でも300円を払う。会場はホワイトバンドを身につけた人間で溢れかえっている。何が純粋で、素直で、「綺麗事」なのか分からない。

私のホワイトバンドは今、机の引き出しの隅に隠すように置いてある。

酒の作用

両親揃って酒好きなのが高じて、私もお酒好きである。365日晩酌をする家庭に育ったせいかな、お酒が人間を豹変させる恐ろしさは人より敏感な気がする。だからいくら飲んでも記憶を失くしたことはない。

一服を済ませて私と友人は早速、東京スカパラダイスオーケストラのライブを見るために会場が一番大きいステージへと向かった。途中で私はビールを、友人たちもそれぞれに買ってライブが始まるまで飲んでいた。友人たちの飲むペースがいつも以上に早い。豹変する確率高し。しかし隣で心配する私を尻目に、彼女たちは既に一杯目を飲み干している。ライブが始まると彼女たちは踊りに踊った。酒を飲んだ直後に騒ぐ。豹変する確率かなり高し…。

酒の持つコミュニケーション能力は凄い。何故だか分からないがROCK会場にはお酒が付き物で、互いに奢り合い、まるで以前から知っているかのように振舞える。毎年この会場で初対面の人たちと友達になることも多々ある。

ROCKと酒の共通点を挙げるならば、人間を豹変させる力があることだろう。酒を飲み過ぎると酔う。同じように音楽も人間を酔わせる。酔いは心地よさを提供してくれる。酒や音楽はコミュニケーションするのに無駄な思考を排除する、下水的な役割をしているのかも知れない。

ライブが終わると、友人が楽しそうにスキップしながら走っていく。目に映るものすべてが面白いらしく笑ってスキップしている。私の予感通り、豹変してしまった。

だから私は記憶を失くせない訳なのである。

懂れの人

「ROCK?二十日鼠かな。シドだかジャニスだかサンダーズだと追っかけて、ある日ふと輪っかの中にいることに気づいて、追いつこう追いつこうと必死に走って、追いついたか?追いつけたのか?と振り返ることもなく走り続けるわけ。答えがないから終わりもない。ロックンロールはそうやって永遠に回り続けるわけ。」川村カオリは自身が監督した映画『696 TRAVELING HIGH』の中でそう言った。

端正な容姿に革ジャン、ギターをかき鳴らしてはハスキーボイスで会場を揺らす。ドクロのアクセサリーを身につけて煙草をふかす川村カオリは、間違いなく“ROCK”を鳴らすために生まれてきた数少ない人間の一人だと思う。彼女が「ロックンロール！」と叫ぶだけで世界が変わるような感覚さえ覚えてしまう。“ROCK”で人の心を動かす力が彼女の才能なのだと思う。

“ROCK”とは一体何を指して言うのだろうか。一視線を奪う恰好良さ？煙草？ギターをかき鳴らす姿？ラバーソールを履きこなすこと？ドクロマーク？音楽に身を任すこと？最高に狂った人？刺青をいれた人をライブで見ること？—私には今挙げたすべてが“ROCK”を指す。つまり、“ROCK”は私の中にある感覚だ。「ROCK！」と叫べば世界は“ROCK”に見える。「ROCK！」と叫んで好きなものに突っ走ること私にとっては“ROCK”だ。しかし「ROCK！」と叫んで道端に空き缶を捨ててすることは“ROCK”ではない。「ROCK！」と叫んで見知らぬ人に殴りかかることは“ROCK”ではない。“ROCK”とはそんなものだと思う。申し訳ないが、はっきり言って“ROCK”が何なのか断言することはできない。

しかし“ROCK”とは、狂った社会に「くだらねえ」と毒を吐く為だけに生まれた言葉ではないような気はする。私には“ROCK”という言葉に一筋の光が見える。「くだらねえからひっくり返してやる」為には“ROCK”があるのでと思う。「くだらねえ」と言える感覚と「ひっくり返してやる」と言える感覚。すなわち「最低」と「最高」を味わえる言葉、「現実」と「理想」が…。いや、こんな理屈を言うこと自体“ROCK”ではない気がしてきた。

映画の最後に川村カオリはひと言、「これからの目標。ロックンロール。」と強く言い放った。彼女には才能がある。

やはり“ROCK”の為に生まれた人間だと思う。

大合唱

今、大合唱の中に私は立っている。

このステージを見に来た観客全員が今、大合唱している。

私にとって「音楽」とは一体何だろう。

ずっと探していた答えが今、見つかった。答えは実に簡単だった。

「生きている」ということ。

ずっと私は「音楽」に答えを求めていたが、答えを求められているのは結局「私」の方だった。音楽が「お前とは一体何だ？」と私に質問していたのだ。

楽しいと感じる時はそれ以上の「楽しみ」を。

苦しいと感じる時は現実ではない「世界」を。

すべては私自身が「音楽」を使って創り上げたもの、答えはすなわち「私の生き方」だった。

「音楽」は「音楽」でしかない。

「音楽」で戦争を終わらせることも、裕福になることも出来ない。

そんなことは知っていた。

でも、ひとつ知らなかったことがある。

「夢」見ることの大切さ。

だから人間は想いを音に託して、音を使って歌をうたう。

一喜一憂するのは当然なのだ。

それが「生きる」ということだ。

大合唱している人たち全員が「生きている」。

「音楽」を恐ろしく感じ、鳥肌が立つ瞬間がある。

私はこの瞬間が忘れられなくて「音楽」を手放せない。

あと 365 日

好きなものにとことん付き合おうと決めた、「音楽とは一体何か」という名の“自分探し”。

お陰で財布には1円も残っていない。

アンケートを左手に、ビールを右手に持ってライブで大興奮。酒に酔った勢いでスキップする友人を追いかけ、はたと気づけば左手のアンケートは一体どこへやら。しかし右手にはしっかりとビール。距離こして1m足らずで見る大好きなミュージシャンは意外におじさんだったり、余りにはしゃぎすぎて笑われたり、使えるトイレを探して20分も30分も歩いたり…。

365日目を心待ちにして私は今日も音楽を聞く。楽しくて悲しくて、怒って、泣いて、苦しんで、悩んで音楽を聞く。

馬鹿らしいと言われようと、否定されようと、笑われようと構わない。

私にとって「音楽」とは「生きる」ということ。

今日も私は「音楽」を使って「生きて」いく。

私が生きている限り、音楽は鳴り続ける。

「あなたにとって音楽とは何ですか？」

いや、間違った。

「あなたは何を使って生きていますか？」

エピローグ

この星にメロディーを

あの子にキスを

君にロックン・ロールを

それだけで生きてけんのは ちっとも不思議じゃねえよ

いかれちまった景色が そこには広がってんのさ
あんたにはきっとなんにも見えねえだろうけど

いかれちまった景色が そこには広がってんのさ
それだけで生きてけんのは ちっとも不思議じゃねえよ

アウトサイダー/ROSSO

楽しいものに囲まれて「夢」を見よう。
美しいものに囲まれて「夢」を見よう。
「夢」を求める限り、ロックンロールは鳴り続く。

私は心から満たされて、穏やかで、でも光が溢れていて、楽しくて体が、心がワクワクして「この先に何があるのか」とドキドキするような「夢」をつかむ。

そう、幸せに突っ伏して、体中が甘い薫りに満ち満ちていく感覚を想像しながら。

(卒業論文指導教員 前嶋 和弘)